様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 25 年 6 月 17 日現在

機関番号：35309
研究種目：基盤研究(C)
研究期間：2010 年度～2012 年度
課題番号：22592472
研究課題名（和文）
初期治療過程に在る初発乳がん患者のレジリエンスを高める看護介入プログラムの開発
研究課題名（英文） Development of nursing intervention program that enhances resilience of early breast cancer patients in the initial therapeutic process.
研究代表者 若崎 淳子（WAKASAKI ATSUKO）
川崎医療福祉大学・医療福祉学部・准教授
研究者番号：50331814

研究成果の概要（和文）：
乳がん診断から周手術期及び術後治療の選択から治療過程に入る迄の準備期を中心に、治療過程に在る成人期初発乳がん患者のレジリエンスを高める看護介入プログラムを開発した。先ず半構成的面接調査を実施し、初期治療を受けるにあたり患者が知りたい情報を整理した。次いで、【初期治療過程の理解】【手術療法に伴う援助】【ボディ・イメージ変容への対処】等で構成したプログラム試案及び視聴覚教材を作成した。教材視聴後の患者面接より、本プログラムは患者の認知的・情緒的側面に肯定的に働きかけ、治療完遂に向けて眼前の困難を乗り越える力を高めることが示唆された。
研究成果の概要（英文）：
With the main focus placed on the perioperative period following the breast cancer diagnosis and on the preparatory period from the decision-making of adjuvant therapy up to the beginning of the therapeutic process, we have developed a nursing intervention program that enhances the resilience of early breast cancer adult patients undergoing the initial therapeutic process, and have created a related audio visual teaching material. This study suggests that the program positively affects the cognitive and emotional aspects of the patients, thereby enhancing their ability to get over the difficulties they are confronted with and to complete their therapeutic process as well.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2010 年度	1,000,000	300,000	1,300,000
2011 年度	1,400,000	420,000	1,820,000
2012 年度	1,000,000	300,000	1,300,000
総　計	3,400,000	1,020,000	4,420,000

研究分野：医歯薬学
科研費の分科・細目：看護学・臨床看護学
キーワード：がん看護・レジリエンス・看護介入プログラム・初発乳がん患者・視聴覚教材

１．研究開始当初の背景

(1)我が国における女性乳がんの罹患率は1975年以降増加を続け、現在では年間約5万人が罹患している。こうした中、乳がんは診断時より全身病と位置づけられ、初発乳がんに対する治療はガイドラインに基づき実施される現状にある。そして、適切な初期治療により、乳がんは治癒や長期に亘り再発をしないことが期待される疾患であるが、治療完遂に向けた治療過程では患者には様々な困難が伴う。

(2)治療期の初発乳がん患者の QOL に関する研究動向では、精神心理面では不安や抑うつ状態等の否定的側面に係る研究はこれ迄に多く蓄積されている。その一方で、患者の肯定的心理に注目した検討は少なく、知見の蓄積が期待される。

(3)本研究は、患者自身がもつ力である精神的回復力、即ちレジリエンスに注目し、治療過程に在る初発乳がん患者を対象に実施した先行研究(若崎他2006、若崎他2007、若崎他2010)を基盤として、初発乳がん患者のQOLの維持・向上に向けて患者のレジリエンスを支持し高める看護介入プログラムの開発を目指したものである。

２．研究の目的

(1)乳がん(病気)と初期治療に関する適切な理解を促す認知的支援の内容に患者のニーズを反映させるため、治療過程に在る成人期初発乳がん患者を対象に半構成的面接を実施し、初期治療を受けるにあたり知りたい情報を明らかにし整理する。

(2)乳がん診断から周手術期及び病理学検査結果を踏まえた術後治療の選択から治療過程に入るまでの準備期を中心とした看護介入プログラム試案を作成する。また、介入プログラム内容の充実・強化を図るため、これに附帯する視聴覚教材(以下DVDとする)を作成する。

(3)作成した看護介入プログラム試案(DVD を含む)を用いて、初期治療過程に在る乳がん患者を対象としたパイロットスタディを実施し、患者の評価をもとに介入プログラム試案の効果を検討する。

３．研究の方法

治療過程に在る成人期初発乳がん患者のレジリエンスを高める看護介入プログラムを開発するため、以下の研究計画・方法にて段階的に取り組んだ。

(1)段階Ⅰ：看護介入プログラム作成に向けた認知的支援の内容に係る基礎調査の実施

A 病院に乳房の手術目的で入院中の成人期初発乳がん患者を研究参加者として、術後急性期を過ぎた時期に研究参加者個別に半構成的面接を1回実施した。研究参加者は以下の条件を満たす者とした。①主治医より乳がんと告知され、一般的な乳がんの治療法と共にご自身の手術及び術後補助療法の必要性に関する説明を受け、手術を始め乳がんの治療を受けることを承諾している、②今回の乳がん罹患・手術以前にがん罹患や乳房の手術の経験がない、③高度の不安や精神科疾患の既往がなく、言語的コミュニケーションが可能である、④本研究について研究代表者から説明を受け、自由意思に基づき研究への参加を同意している、⑤年齢が 20～64 歳にある女性患者。面接ガイドの内容は、①手術目的での入院待機中のがん治療開始前に知りたい情報・解決したい事柄・解決の方法、②術後治療選択に際して知りたい情報・解決したい事柄等、認知的支援のためのデータ収集を中心に構成した。面接内容は研究参加者の承諾を得てテープ録音し逐語録を作成した。分

析は、内容分析の手法を用いて研究参加者別の個別分析後、全研究参加者分析を実施した。

(2)段階Ⅱ：治療過程に在る成人期初発乳がん患者のレジリエンスを高める看護介入プログラム試案及び視聴覚教材(DVD)の作成

段階Ⅰの基礎調査結果に乳がん患者のレジリエンスがQOLに及ぼす影響を検討した先行調査から得た知見、乳癌診療ガイドライン等の文献を基礎資料に加え、看護介入プログラム内容を検討した。特にレジリエンスと社会性QOLとの関連から、家庭や社会において多様な役割をもち、それを遂行しながら生活を営む成人期の特徴を考慮した。検討過程では研究メンバーで審議すると共にプログラム内容の妥当性を乳腺専門医に相談、乳がん患者会に所属する乳がん体験者に意見を求めた。

また、模擬患者を登用し、実際の看護ケア用品を活用して介入プログラム内容と連動させたDVD試作を作成した。そして、初発乳がん患者用の視聴覚教材として完成をめざし、乳腺専門医の監修を受けた。

(3)段階Ⅲ：視聴覚教材を活用した看護介入プログラム試案を用いたパイロットスタディの実施～看護介入プログラムに附帯する視聴覚教材(DVD)視聴と面接調査の実施～

A病院に乳房の手術目的で入院中の初期治療過程に在る成人期初発乳がん患者を研究参加者として、パイロットスタディを実施した。研究参加者の条件は、段階Ⅰの①～⑤と同様に揃えるよう努めた。研究参加者個別に周手術期及び術後治療の選択から治療過程に入る準備期の2回訪問し、並行してDVD視聴を依頼した。DVD視聴の時間帯は研究参加者の希望に合わせ、DVDは章立てしてあるためどの章から視聴しても構わず、あるいは「自分が見たいなと思う」章のみの視聴で構わないこととして、心理的負担を防ぐと共に個人の時間的損失を回避した。これを視聴後、研究参加者個別に理解した内容・役に立った事柄・改善点等に係る半構成的面接調査を実施した。そして、患者評価を基に視聴覚教材内容及びそれを活用したプログラム試案の効果と課題を検討した。

以上は川崎医療福祉大学倫理委員会の審査を受け、承認を得て実施した。

４．研究成果

(1)初期治療過程に在る成人期初発乳がん患者が知りたい情報

段階Ⅰの研究参加者は21名で、手術後6～11病日に研究参加者個別に1回、40～90分(平均73.3分)の半構成的面接調査を実施した。研究参加者の概要は、年齢は33～59歳(平均45.0歳)、実施術式は乳房温存術13名、乳房切除術5名、皮下乳腺全摘＋乳房再建術3名であり、腋窩リンパ節郭清をした者は21名のうち6名であった。

面接内容を逐語録におこし、一文脈一意味を分析単位として研究参加者別に個別分析後、全研究参加者にて質的に分析し検討した。その結果、初期治療を受けるにあたり乳がん患者が知りたい情報は、【術式と術後経過のイメージ形成】【病理学検査結果に基づく各治療法】【初期治療過程の全貌】【治療中と再発予防に向けた生活管理】【娘をもつ母親として遺伝性・家族性乳がんへの関心】の5カテゴリーに整理できた。

(2)看護介入プログラム試案の作成

看護介入プログラムの基本的考えを①局所的全身的ながん治療が連続する初期治療過程に在る困難を1つずつ乗り越え、人生を積極的に生きる、②病気と上手に付き合うために乳がんと初期治療を正しく知り、自身の心と身体を守る、とした。プログラムにおける介入目標を①乳がん初期治療過程を理解

し見通しをもつ、②自分自身で実施可能な事柄や方法を知る、③社会資源を知り、治療中も自分らしく在り生活するために活用する、とした。

そして、看護支援の大項目に【初期治療過程の理解】【手術療法に伴う援助】【ボディイメージ変容への対処】【患者会の紹介】を抽出し、具体的な支援項目案を作成した。支援内容は初発乳がん患者のレジリエンスを高めるために、①乳がんと初期治療の理解に関する認知的支援、②がん罹患や治療に伴う困難な状況に屈しない情緒的支援、③初期治療過程に対する肯定的な見通しがもて治療中の生活過程を整える教育的支援の3点とした。特に、先行研究で介入の必要性が指摘された病気と初期治療に関する適切な理解を促す認知的支援については、段階Ⅰの基礎調査結果を支援の項目に反映させ、以下を挙げた。乳房やリンパ節に関する術式と選択方法、術後ドレナージや術後経過、術側肩関節上肢の運動と日常生活への取り入れ方、腋窩リンパ節郭清時の日常生活でのリンパ浮腫予防及び発生時の対処方法、初期治療のプロセス、標準治療、病理学検査項目と治療計画及び術後薬物療法の種類と選択等。

(3)看護介入プログラム試案に附帯する視聴覚教材(DVD)の作成

動画による視聴覚効果と治療過程に対する適切で実際的なイメージ形成ができ、プログラム内容の充実・強化を図るためにプログラム試案に附帯するDVDを作成した。作成にあたっては模擬患者を登用し、臨床看護に即した実践的内容とした。DVD内容は乳腺専門医の監修を受け、視聴覚教材「あなたの心を強くする-乳がん治療の理解と生活ガイド～乳がん体験者に聴いた治療前に知りたい情報～」(約70分)として完成させた。このDVDは全5章から成り、「第1章入院生活と手術」「第2章手術後のリンパ浮腫予防」「第3章初期治療の理解」「第4章ボディ・イメージの変容と対処」「第5章患者会の紹介」で構成され、看護介入プログラム試案と連動し活用する。

(4)視聴覚教材を活用した看護介入プログラム試案の効果と課題

段階Ⅲの研究参加者は、治療過程に在る成人期初発乳がん患者8名(年齢37～65歳：平均48.4歳)で、実施術式は乳房温存術3名、乳房切除術4名、乳房切除＋乳房再建術1名であり、腋窩リンパ節郭清をした者は4名であった。面接時間は平均56.7分であった。

面接内容より、DVD視聴は動画説明と繰り返し視聴可能という利点があり、①治療過程や治療内容に関する理解が促進できる、②正しい情報が整理され、今、自身に必要な知識が獲得できる、③がん治療生活の実際的かつ肯定的なイメージ形成及び準備行動につながる等の効果が得られた。また、プログラム試案に基づく介入は、自身の乳がんと初期治療に関する適切な理解への認知的支援、担う社会的役割遂行を中心に治療中の生活過程を整える教育的支援、局所的全身的治療が連続する乳がん初期治療という困難な状況の中で患者が感じる揺らぐ・躊躇う・挑む気持ちを情緒的に支えることに対応し、治療完遂に向けて眼前の困難を乗り越える力を高め、未来志向の援助につながることが示唆された。一方、入院加療開始前の外来受診時の視聴のタイミングと場所に関する意見、ホルモン療法の副作用対策、治療と就業の両立について支援を求める等の課題が見出された。

今後、本プログラムの有用性について、測定器具を用いた質問紙調査を乳がん診断・治療開始前から初期治療過程において縦断的に実施し、レジリエンスやQOLの推移を観察し検証する必要がある。その上で、本プログ

ラムを活用した看護実践モデルの開発を展望している。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計２件）

①若崎淳子、松本啓子.病理学検査結果を待つ術後に在る40～50歳代初発乳がん患者の心理的状況.インターナショナルNursing Care Research.11(2).2012.119-131.査読有.

②若崎淳子、掛橋千賀子、谷口敏代、森將晏.成人期初発乳がん患者のQOLに関する縦断研究(その1)～手術前から手術後1年までのQOLの経時的変化とその要因.日本クリティカルケア看護学会誌.6(1).2010.1-15.査読有.

〔学会発表〕（計８件）

①谷口敏代、若崎淳子.成人期乳がん患者のQOLに関わる要因（その1）知覚されたソーシャル・サポートの影響.第27回日本がん看護学会学術集会.2013年2月17日.石川県立音楽堂(石川県).

②若崎淳子、谷口敏代、掛橋千賀子.初期治療過程に在る成人期乳がん患者の治療に対する適切な理解を促す認知的支援の検討.第32回日本看護科学学会学術集会.2012年12月1日.東京国際フォーラム(東京都).

③谷口敏代、若崎淳子.成人期乳がん患者のジェンダー特性とQOL.第38回日本看護研究学会. 2012年7月7日.沖縄コンベンションセンター(沖縄県).

④若崎淳子、掛橋千賀子、谷口敏代、森將晏.治療過程に在る初発乳がん患者のレジリエンスを高める看護介入プログラムの開発-プログラム内容の検討-.第38回日本看護研究学会.2012年7月7日.沖縄コンベンションセンター(沖縄県).

⑤若崎淳子.治療中の脱毛ケアーあなたらしく生き生きとー.川崎医科大学附属病院乳がん患者会平成24年度医療講演会(招待講演).2012年5月27日.川崎医科大学(岡山県).

⑥若崎淳子.初期治療過程に在る初発乳がん患者のレジリエンスを高める看護介入プログラムの開発-看護介入用視聴覚教材内容の検討-.第22回日本医学看護学教育学会.2012年3月25日.鳥取大学(鳥取県).

⑦若崎淳子、掛橋千賀子、谷口敏代.初期治療過程に在る成人期初発乳がん患者が知りたい情報.第26回日本がん看護学会.2012年2月12日.くにびきメッセ(島根県).

⑧若崎淳子.心のよりどころ：あげは会～「悩み相談会」を中心に～.川崎医科大学附属病院乳がん患者会平成23年度医療講演会(招待講演).2011年5月29日.川崎医科大学(岡山県).

〔その他〕（計１件）

①企画・著作：若崎淳子、監修：園尾博司.初発乳がん患者用視聴覚教材DVD「あなたの心を強くする-乳がん治療の理解と生活ガイド～乳がん体験者に聴いた治療中に知りたい情報～」.

６．研究組織

(1)研究代表者

若崎　淳子（WAKASAKI ATSUKO）
川崎医療福祉大学・医療福祉学部・准教授
研究者番号：50331814

(2)研究分担者

掛橋　千賀子(KAHEHASHI CHIKAKO)
関西福祉大学・看護学部・教授
研究者番号：60185725

谷口　敏代(TANIGUCHI TOSHIYO)
岡山県立大学・保健福祉学部・教授
研究者番号：10310830

森　將晏(MORI MASAHARU)
岡山県立大学・保健福祉学部・教授
研究者番号：90093715
（2011 年度まで）

(3)研究協力者

森　將晏(MORI MASAHARU)
倉敷中央病院・病理検査科・病理専門医
（2012 年度）

園尾　博司(SONOO HIROSHI)
川崎医科大学・乳腺甲状腺外科学・教授